

# 安倍元総理を偲ぶ

## 編集部

二〇二二年七月八日に偉大な政治家、安倍晋三元総理大臣が凶弾に倒れた。日本の憲政史上最長の総理在任期間を持ち、その間一貫して戦後の占領下に歪められた日本のありようを見直し、混沌とした世界情勢の中にあっても、毅然として未来に向けて日本が生き抜く道を示し続けた安倍元総理を失ったことは痛恨の極みである。

九月二十七日に北の丸公園の武道館で行われた国葬において、岸田総理は葬儀委員長としての追悼の辞の中で「あなたは我が国憲政史上最も長く政権にありましたが、歴史はその長さよりも達成した事績によってあなたを記憶することでしょう。」と述べた。

岸田総理は、その追悼の辞の中で、安倍総理の国内的な課題解決面での業績として、「戦後レジュームの脱却」を掲げて、防衛庁の省昇格、平和安全法制および特定秘密保護法の成就、憲法改正に向けての国民投票法の制定、教育基本法の六十年ぶりの改訂など挙げている。

また外交面では、「自由で開かれたインド・太平洋の枠組み」を掲げて、日米関係の強化、日・米・豪・印四か国によるクワットの枠国の構築を、さらに欧州との経済連携協定および戦略パートナー協定の締結、アジア地域、ユーラシア地域、中東、アフリカ、中南米地域との深い協力関係の構築などを挙げ、「自由、民主主義、人権と法の支配を重んじる開かれた国際秩序の維持増進に、世界のだれよりも力を尽くしたのは安倍晋三その人でした。」と述べた。

たしかに後世の人が安倍元総理の名前からはこれらの業績が頭に浮かぶであろう。しかし、我々の心の中に残るのは、そうした業績（事績）も然ることながら、国のリーダーとしての姿勢ではないだろうか。

第一次安倍内閣の一年間で安倍元総理は、「戦後レジュームからの脱却」を掲げて日本国家、日本人の本来の姿を取り戻すことに尽力された。この「戦後レジュームからの脱却」という言葉の裏には、東京裁判史観あるいは、いわゆる自虐史観からの脱却との意味合いを感じる。だが、このことは単にGHQの占領政策や東京裁判により歪められた日本の社会と日本人の心を、元に戻すという懐古的な意味合いではないであろう。

「戦後レジュームからの脱却」とは、将来にわたり日本国家が存続し繁栄していくためには、戦後半世紀以上を経て移り変わってきた国内外情勢を踏まえ、現在の情勢とそれに続く未来を見据えた改革の必要性が込められた言葉であろう。その改革の第一歩は、日本人の和を貴ぶ「心」と一致団結して国難に立ち向かう「意志」と「力」を取り戻すことであろう。これは日本人としての「誇り」

を取り戻すことでもあり、安倍元総理の心の中には常にそのことがあったように思える。安倍元総理が力を入れた憲法改正（国民投票法）や教育改革はそのための第一歩であったと言える。

民主党政権下の平成二十四年五月に郷友連盟主催の「安全保障フォーラム」の第百回記念講演会を開催した。その場に安倍晋三元総理をお招きしたところ、快くお出でいただいた。演壇に立って日本の将来への思いを熱く語る安倍元総理の姿に感銘し、聴講者一同が安倍総理の政権復帰を強く願ったことを思い出す。その半年後に自民党が政権の座に返り咲き、安倍内閣が再始動することとなった。

第二次から第四次までの安倍内閣の七年有余の間では、「地球儀を俯瞰した外交」「自由で開かれたインド・太平洋」を掲げ、複雑で過酷な世界で「誇り」を持って日本が発展していく道筋造りに踏み出した。そこには単なる「思い」だけではなく、第百回郷友安保フォーラムで垣間見せた「情熱」と「愛情」の溢れる安倍元総理ならではのリーダーとしての姿が見られる。この「思い」、「情熱」、「愛情」といった国の指導者としての資質こそが、安倍総理の残したものであろう。さまざまな事績はその資質を持った指導者の下で作られた結果としての形であり、時代とともに移り変わり歴史の一部になっていくものである。

国葬では、岸田総理に続いて衆参両院議長、次いで最高裁長官が追悼の辞を述べた後、菅元総理が友人代表として遺影の前に立った。菅元総理の安倍元総理を偲ぶ心のこもった言葉には、皆が感動させられた。特に、菅元総理が引用した明治の元勲山形有朋が伊藤博文の死に際して詠んだ「かたりあひて 尽しゝ人は 先立ちぬ 今より後の 世をいかにせむ」は、生前の安倍元総理の偉大な姿を目に浮かばせ、聞く人の心を打つものであった。

今後の日本の国家指導者たちが、安倍元総理に負けない「思い」、「情熱」、「愛情」を培い、安倍元総理が踏み出した道を切り開き、日本人皆の幸福のため、日本国の発展に向かって国を導いていくことを期待したい。

国民の一人として安倍元総理の思いに少しでも寄り添った活動を続ける決意を心に秘めつつ、日本国家、日本人の進むべき道筋を示してくださった安倍総理に感謝し、ご冥福をお祈り申し上げます。

（ 追 記 ）

国葬が行われた日の前後に、安倍元総理の国葬を巡り国論が2分されているとの報道が目に残った。

これは日本の安定した政治態勢を混乱させるチャンスと見た左派共産勢力の一大キャンペーンと左派系マスコミによる偏向報道の表れである。この反政府キャンペーンに同乗したかのような政権負託能力ゼロの野党やリベラルを自任する一部の市民団体等の声高な叫び、これらに少しだけ心を動かされた無辜の一般国民が時間とともに落ち着きを取り戻し、安倍元総理の偉業に目を向けるであろうことを期待したい。

なお国葬直前に、国葬反対が過半数で賛成は三十%台との世論調査結果が大々的に報じられたが、この世論調査は朝日新聞とNHKが急遽行ったもので、ウクライナ領のロシア占領地域でのロシアによる国民投票ほどではないが、この報道の数字を鵜呑みにはできないことは言うまでもない。

四千数百人に及ぶ国内外の国葬参加者、そして九段坂公園における予定時間を超えて夜間に及んでも絶えることのない三万人以上の一般国民の献花を見れば、国葬の意義は明らかである。

翌日の朝日新聞には、途切れることのない献花の列と国葬会場とは離れた場所での一部の反対デモとが、あたかも同列の規模であるかのような写真を掲載して国論二分を大きく報じていた。まさに国民を愚弄し、外国に日本が混乱しているかのような誤った印象を与えることが狙いのような報道であり、日本の国益を著しく損ねる愚行としか言いようがない。

これらの反国葬キャンペーンに動じることなく冷静さを保ち、国葬を整齊と挙行了した政府の勇氣に敬意を表したい。



郷友安保フォーラムで日本の将来を熱く語る安倍元総理